

包括的な中国研究を

権根 勇

(ICCS フェロー・筑波大学名誉教授)

- ・ 近代 (Modernity) という時代は終わった。その決定的証拠が地球温暖化である。IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change) が 2007 年度のノーベル平和賞を受賞したことには、二つの重要な意味がある。第一は、過去 4 回の IPCC 評価報告書が、世界中の仲間 (ピア peer) が自己組織的につくった研究者集団の仕事だったということ、第二は、かれらが地球温暖化について、科学的事実だけでなく、経済活動や、社会システムの改変までを幅広く論じていることである。
- ・ 近代という時代を支えてきた柱は、デカルト的二元論とニュートン物理学である。近代科学の考え方の基本は主客分離と要素還元主義である。その世界観は機械的決定論であるが、それは 20 世紀前半に量子力学によって否定された。量子論に基礎を置く世界観は、絶対的偶然・確率的法則・非決定論である。科学の最大の世間的効用は、初期条件と境界条件を定め、対象を記述するアルゴリズムが決まれば、未来予測は可能であるということだった。だがその効用に、疑問符がついたのである。
- ・ 20 世紀の知の枠組みは、物理学を範として組み立てられている。それは、古典物理学が、数学で記述した法則によって自然を説明することに、あまりにも見事に成功したからである。アダム・スミスの経済学は、ニュートンの天体力学を範としている。物理学以外の自然科学は物理学を範とし、社会科学は自然科学を範とした。しかし環境 (客体) の側から見ると、20 世紀に構築された知は「自然の価値」を無視していた。
- ・ 主客分離の科学的方法によれば主体による客体の客観的認識は可能である、とされてきた。しかしながら、主客分離は現象 (客体) から自分自身のはたらきを排除するから、「どうすれば自分は善く生きることができるか」という実践的な問題には答えをだすことができない。その結果、20 世紀に、科学・技術・経済が暴走した。
- ・ 環境問題の発生は、近代化の必然的帰結であり、それを象徴する事変が地球温暖化である。温暖化した地球に対して、人類は適応以外の方法をもたない。しかしこのままの速度で温暖化が進めば、やがて大気中の二酸化炭素濃度が致死量 (3%) にまで達し、人類は窒息死する (ここまでは、拙著『現代中国環境基礎論』の要約)。
- ・ したがって、ポスト近代では、20 世紀の知の枠組みの再構築が必要である。そのための一つの枠組みとして、ウィルバーの「万物の理論」を私は評価したい。ただし、彼は自然と環境を右下象限に入れているが、私は、それらは四象限の全てに含まれるべきだと考える。その実地調査例を「麗江古城の環境論」で述べた。他に「世界遺産・麗江古城の水と環境——持続可能な社会システムの構築に向けて」も参照されたい。

- ・ 私は、ウィルバーと同様に、21世紀の知の枠組みは「統合学 Integral Studies」であるべきだと考える。統合学とは、四象限の知を包括した、未来問題に対処するための行動の基礎を提供するものでなければならない。すでに環境問題に関する私の考えは、「統合学としての新しい環境学」にまとめてある（Web で公表予定）。環境学と医学は統合学の代表選手であり、「地域に関する学（現代中国学を含む）」も統合学的な性格を有すると考える。
- ・ 統合学の研究法の中核を占めるのは、関係するあらゆる情報を取り込んだデータベースの構築である。20世紀の科学の成果は、理論や、イデオロギーや、シミュレーション・モデルを含めて、全てがデジタル情報化可能である。
- ・ 環境学データベースのモデルの一つを、私はすでに、「環境情報基地」として提案した。それは環境情報の全てを含むものであり、無料で、自由にアクセスやダウンロードができ、多言語対応で、双方向性で、たえず自己進化するようなデータベースである。具体的には、巨大な「多言語ウィキペディア」のようなものを想定されたい。
- ・ このような私の考えと全く同じことを、タブスコットとウィリアムズが『ウィキノミクス』で提案している。Wikinomics は、Wikipedia と Economics の合成語である。この本（英語版は2006年、日本語版は2007年発行）につけられた英語の副題は<How Mass Collaboration Changes Everything>で、日本語訳は「マスコラボレーションによる開発・生産の世紀へ」となっている。
- ・ 経済学（者）も、私が考えていたように、モノから情報へとパラダイム・シフトして、新しい知の再構築に動き始めたようである。この本には、ウィキノミクスの基本原理は、①オープン性、②ピアリング、③共有、④グローバルな行動の四つだと書いてある。
- ・ 私が、「IPCCの仕事はウィキノミクスであった」と言ったとしても、多分どこからも文句は出ないであろう。世界はある方向へ、誰が指示するともなく、多くの人たちの協働によって、確実に動いている。別な言い方をすれば、世界は進化している。
- ・ 不特定多数の人々の協働によってしかできない仕事を、個人で行おうとしても、能力的にも、仕事量としても、不可能である。知の世界でも、ウィキペディアやグーグル・アースに代表されるような無料データベースの出現によって、階層的秩序は消失しつつある。今後も、この傾向が、加速されながら続くのは確実である。
- ・ 上に述べた「地域に関する学についての私見」を踏まえて、現代中国学の新たなパラダイムとして提唱された「コ・ビヘイビオリズム」に対する、環境（客体であるが主体でもある）の立場からの意見を、シンポジウム会場で、口頭で行いたい。

引用文献

愛知大学国際中国学研究センター（2007）：国際シンポジウム「世界遺産・麗江古城の水と環境～持続可能な社会システムの構築に向けて～」. 24p.

榎根 勇（2006）：現代中国環境基礎論. 愛知大学国際中国学研究センター, 134p.

タブスコット, D. & ウィリアムズ, A.D. (2007) : ウィキノミクス. 日経 BP 社, 503p.